

族に喜んで迎えられた当時を想い浮かべ、妻共々  
苦笑しての余生を安楽に送る毎日です。

## 山西の追憶

福岡県 井上文助

私は、両親の許に六人兄妹の四男として生まれました。兄三人に次ぐ四男で、妹が二人おりました。家業は漁業でした。小さな舟を二、三艘（手漕とポンポン船）を持っていました。一本釣漁法で筑前の近海に出ては鯛、鯖、鰹などを漁獲していました。

生活様式は一般並でした。近隣の人達も毎日を楽ししく、笑い声の絶えることなく人情味豊かで、他人の子供も自宅の子も同じように可愛がり、時には怒鳴って社会教育をしていました。幼少の頃は至極幸福でした。

私が小学校六年生の時に、父親が他界したことが一番残念でした。長兄が家業の後を継いで、従前通りの生活を守ってくれました。今思っても兄達は大変だったろうと感謝しています。私も小学

校の義務教育終了で、働きに行こうと思いましたが、兄達が「これからは勉強せねば駄目だ」と言っ  
て、高等科に二年間通学させてくれました。卒業した頃は、日支事変以来、世間が物騒になり、軍国色一辺倒になりました。

私は職業の選択で、少し迷いましたが、家業の關係から魚類取扱の方が良いと思って博多の佃煮製造本家で修業すべく、丁稚奉公にて就職しました。

二年間勤めまして、岡山県倉敷の同じ佃煮会社を紹介されました。ここでは職人番頭として働き、給料も多くなり、いくらかは実家に送金することができました。

この頃は、全国的に軍の意向もあって青年学校が設立され、働く青少年に軍国思想の「注入」を義務化させていました。週に二日、夜間学校教育でした。退役将校や満期除隊の下士官が教官でした。私も通学して学んだことが、その後の人生に大変に役立ちました。

第一番に軍人勅諭だった。明治天皇陛下が示されたお言葉の「五ヶ条」は、第一項忠節の項を愛国に変え、以下「礼・武・質・信」これは全人類の守るべき事項です。さすれば永遠の平和・幸福の極と、私は思います。取りあえず、五ヶ条を全部頭に入れ（丸暗記）した事が以降の生活（特に軍隊）で役立ちました。

陸軍命令にて『第三次軍属徴用工員として、神戸製鋼所・第十重機械科へ出頭、勤務せよ（日時記憶不明瞭也）』となり、一日十二時間の勤務でした。業種は鉄鋼の仕上げでした、厳しかったが若さで克服しました。

宿舎は会社の社員寮「まや荘」でした。戦線はますます拡大し、日本本土にも敵機が来襲し、空襲警報が発令されるようになりました。私にも徴兵検査の通知が来ました。福岡の本籍地へ帰らずとも、現住所にて、連隊区の徴兵執行官の命令に従えということでした。

神戸市灘区の稗田国民学校の講堂で受験しまし

た。大都会で会社や工場の関係で多くの受験者がいました。私は執行官から「井上文助・第二乙種合格」と申し渡されました。執行官に復唱して会社に帰り、即日上司に報告し、同僚達とは入隊について種々話し合いました。中に一人軍隊体験者がいて、何くれと説明してくれました。

昭和十九年十月十二日に「現地入隊せよ」の召集令状が来ました。現地とは北支でした。会社で盛大な壮行会をして頂きました。郷里福岡へ帰って氏神様に参詣し、必勝祈願並びに武運長久を念じ、父祖の霊前に出陣を報告しました。近隣町内会の方々、婦人会や国民学校の小さな児童生徒たちの見送りを頂戴して壮途につきました。

宇品か広島か山口県下関か、定かに思い出せませんが、そこに集合でした。

現地は正式名称「北支方面軍(甲)〔北京〕第一軍(乙)〔太原〕独立歩兵旅団。秘匿号、固(かため)第六七九〇部隊・第二七大隊・第一中隊」

でした。場所は山西省孟県です(太原北東約百キロ)。

自分達補充兵の集合教育は簡略でした。即実戦体制でした(青年学校教育が、大いなる助けでした)。約六十日程で第一期の検閲終了でした。

即日各人に特業(本科の外に特別業務を履行する事)を申告するよういわれ、自分は中隊長室に呼ばれて「井上二等兵、貴様の特業は衛生兵、だ」と人事係曹長立会で申し渡されました。軍隊の兵隊言葉に「一にヨーチン(衛生兵)二に喇叭・三に炊事の常当番、死に物狂いの蹄鉄工(テツチン工)」といって、一番楽な特業が衛生兵だったそうです。

昭和二十年一月に中隊より三人が衛生兵教育のために陽泉陸軍病院に派遣されました。以来百日余り一生懸命に勉強しました。結果、現在でも人体の構造、諸疾病の手当、予防等が頭にあります。まず骨格も頭骨に始まり全身は百八つの骨片にてなり、各筋肉名称や血流組織、五臓とは心・肺・

腎・肝・脾を言い、六腑とはその他内臓の事を指す。就中、病気についても法定伝染病から各地方特有の風土病に至るまで、特に集団生活では注意すべきは伝染病でした。チフス・赤痢・疫痢・テング熱・マラリア等々でした。

特筆すべきは非衛生的な外地の戦場生活です。身体は不潔になります。入浴（ドラム缶風呂）も時々入る位でした。自然に蚤や虱が発生しました。班内の敷物（アンベラ）を掃除すると、虱の固まった団子ができるようでした。

古年次兵の中にはどこで伝染したのか毛虱を沸かして痒くて難儀していました。自分が初年兵の補充兵で衛生兵ですから先輩の古年次兵から重宝がられて良く可愛がられました。毛虱の古兵から「井上、水銀軟膏をくれ」と人目を忍んで要求されました。

勤務場所は陽泉診療所です。自分の外に衛生上等兵がいて、常時二人で勤務していました。ただ

し医療器具も医薬品も無く、名称のみの診療所でした。ただ異なるのは、自分も上等兵も左胸に三センチの緑の山形を付けていたことです。本科の兵隊さんと変わりなく勤務していました。

その頃、毛沢東の中国共産党八路军が勢力を増大し、鉄道沿線への出沒が激しくなり、「治安警備に出動せよ」と命ぜられました。二十四時間体制で我が中隊長以下全員がその任務に着きました。

自分は歩兵ですが、衛生兵ですから「三八式歩兵銃」の取扱いは不馴れでした。それでも実弾を装填し、着剣した銃を腕にして警備の任に務めました。その上に敵は地の理を充分熟知しているから、夜間襲撃に対抗するのは大変困難を極めました。

この頃に中隊で二人の戦傷（病）死者が出ました。一夜「屍衛兵」に就きました。着剣した三八式歩兵銃を構えての「立哨」でした。翌日の夕方遥か遠い地平線の彼方へ真赤な夕日が沈む頃

「茶毘」に付しました。戦傷者は数人いましたが戦死はこの「二柱」でした。鉄路沿線警備が自分達に与えられた毎日の任務でした。衛生兵でありながら、これ以外にこれといつて務めた記憶は無しです。

八月十五日の昼食後だったと思います。「今大本営からの特電が入った」「畏れおおくも天皇陛下が終戦の詔勅を発せられた」でした。なんだか気が抜けたようでした。中隊長がその夜全員に「日本帝国は全戦線で敗れた。以後、軽率妄動のないように」と爾後の命令を待ってくれということでした。

旬日を経ず、中国蒋介石の正規軍が来て、各地区の撤収作戦が大変でした。そして武装解除が行われました。全員丸腰となり、十一月頃でしたが「清源城内」へ行進しました。戦時中は住人皆無でしたこの街に、老人から女子供まで、今までどこに潜んでいたのか不思議な程の多勢の人が充満していました。しかしその翌日から大変でした。

蒋介石軍の将校が来て「日本軍捕虜の出勤を要請する」でした。中共八路軍の攻撃が猛烈で、防戦のために日本軍の助力を懇願されたのです。翌日から大変だった、引き上げた武器を再び貸与されて、中共八路軍に対して攻撃を行い、また防戦するのです。八路軍も国府軍に対しては強いが、日本軍には弱くて一進一退が毎日続きました。防戦や攻撃の都度に、没収兵器を倉庫より出したり入れたりでした。

自分の中隊には死傷者は無かったが、他部隊では死傷者が出たそうです。果たしてこの中国内戦にて戦死された「戦友」の処遇はどのようなものになるのだろうか。果たして公報はどのように発令されたのだろうか、現在も心に残っている事です(靖国神社に合祀されただろうかも含めて)。

右のような事件は自分達の駐留した「清源城」地区に留めた話でなく、全中国国内で行われた事だったと思う。自分の軍歴は僅か十二カ月だ。捕虜(PW)として生活八カ月、合計二年の体験で

したが、終生忘れることなく子々孫々に語り伝えたく思っている。

昭和二十一年五月、中国から引き揚げ、船は米軍の上陸用舟艇LSTで、入港したのは佐世保の針尾島埠頭でした。日本全国の荒廃した街も山河も、いや人心までも無味乾燥して人間味を失っていました。すべて戦争のもたらした罪科である。昔のように心豊かな人間の日本人を取り返してほしいと願うのは、私一人に非ずと信じます。

八十歳の今日まで生きてきました。

少しでも世のため人のためと、これからも残余の生命を尽くしたいと思っている今日この頃です。

なお、復員時のよれよれの襤褸軍服を身に纏っていました。胸には衛生兵表示の緑の山形の胸章を付けていました。戦没者の御霊の泰きを念じます。

## マラリアと禍福

山形県 手塚省三

私は、大正十一（一九二二）年九月七日、山形県西置賜郡飯豊町黒沢で生まれました。農家の三男です。父も兄も弟（私が入営した後海軍へ志願）も一家揃って、国家のため軍務に努め、日本男子として誇りをもっていました。私は昭和十七（一九四二）年十二月一日、山形の歩兵部隊へ入営しました。その当時の私の家の情況は、次のようでした。

父 健在 農業

（水田 一町歩、畑 二反歩、

山林 一反歩、原野 二反歩）

母 健在

兄（長男） 健在 出征中

兄（二男） 若死

本人（三男） 健在 農業